

# ヴィクトール・グリフェールと オーギュスト・クーフェ

——20世紀初頭フランス CGT における革命主義と改良主義——

清水 克 洋

## 目 次

はじめに

第1節 グリフェール CGT 書記前史

第2節 CGT におけるグリフェールとクーフェ，対抗から協調へ

第3節 1904年7月29日グリフェール・クーフェ論争

おわりに

## はじめに

J. ジュイアールは、フランス労働総同盟 CGT（以下、CGT）による8時間労働日実現を掲げた1906年メーデーに関して、次のように指摘する。「CGTの革命主義者たちは、屈辱的にも、彼らの指令が、彼らを完全に避けた部門、書籍でのみ実行されるのを見た」。「書籍では、クーフェの指揮のもとで、しっかり根付き、組織された組合が、パトロンとの交渉の開始と、労働時間の顕著な短縮を獲得した」。「CGTの指導者たち、V. グリフェールと E. プージェは言説と実行のずれを完全に認識し、そこから、いよいよ、彼らの改良主義的实践への事実上の移行が生ずる」<sup>1)</sup>。フランス労

1) Jacques. JULLIARD, *Les Gauches françaises. 1762-2012: Histoire, politique et imaginaire*. 2012. p. 473.

働組合運動における革命主義の体现者グリフェールという通説を踏まえながら、むしろ改良主義への転換に舵を切ったことで、時代の変化を読み取った「巧みな戦術家」としてグリフェールを評価するのである<sup>2)</sup>。それは、改良主義を抑え込むことによって革命主義が確立されたとする理解を相対化し、上記の転換における改良主義指導者 A. クーフエの決定的役割を認めるものでもある。我々の課題、A. クーフエの全体像構築にあたって、書籍労連における主導権掌握に次いで検討すべきは、CGTにおける彼の役割であり、通説に大胆な問題を投げかけるジュイアールの指摘が持つ意味は大きい<sup>3)</sup>。本稿は、これを手掛かりとした、A. クーフエと V. グリフェールの関係についての試論である。

20世紀初頭のフランス労働組合運動、その中心となったフランス労働総同盟 CGT を特徴づけるのは、ゼネラル・ストライキを通じた社会変革、資本・賃労働関係の廃絶を掲げる革命的労働組合主義であり、その中心的指導者、体现者がヴィクトール・グリフェールとされる<sup>4)</sup>。CGT 書記としてのグリフェールの足跡は、以下の4点にまとめることができる。まず、1899年の共和国防衛政府への社会主義者ミルラン入閣に反対し、改良主義

2) Cf. J. JULLIARD, *La charte d'Amiens, cent ans après. Text, context, interprétations. Mil neuf cent. Revue d'histoire intellectuelle.* 24. 2006, p. 12. この論考においてすでに同趣旨の指摘がなされている。

3) 拙著『オーギュスト・クーフエ考 19世紀末フランス書籍労連における改良主義と革命主義』2022年、参照。

4) Cf. Edouard DOLLÉANS, *Histoire du mouvement ouvrier II 1871-1936.* Chapitre II. Victor Griffuelhes et la Charte d'Amiens (1902-1908). 1948. Bruce VANDERVORT, *Victor Griffuelhes and French Syndicalism 1895-1922.* 1996. *Les Hommes du jour.* 1909 Février 13, FLAX, Victor Griffuelhes. Jean. MAITRON, *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*, 12. 1974. Michel DREYFUS, *Histoire de la C.G.T.* 1995. 喜安朗『革命的サンディカリズム パリコンミュン以降の行動的少数派』1972年、上村祥二「革命的サンディカリズムの生成」『西洋史学』第88巻、1972年、参照。

を批判する勢力に推されて1901年に CGT 書記に就任したこと。第 2 に、1902年 CGT モンプリエ大会において、全国労働取引所連盟との合同を実現し、革命主義的な勢力を糾合し、1904年ブルジュ大会において、改良主義者と対峙し、比例投票制動議を退けるとともに、1906年メーデーをゼネラル・ストライキで闘う方針を確立したこと。第 3 に、1906年アミアン大会において、改良主義者とも妥協して、社会主義政党に対する労働組合の独立性動議、後のアミアン憲章の採択にこぎつけたこと。第 4 に、ヴィランヌーヴ・サン・ジョルジュ事件の責任者としてクレマンソーによる弾圧、極左勢力の離反、CGT 会館購入問題でのスキャンダル等を原因とした1909年の失脚である<sup>5)</sup>。

ところで、このすべてに、書籍労連書記 A. クーフェが深くかかわっていた。1895年 CGT 設立に積極的役割を果たし、初期 CGT の運営に加わった。商工業大臣ミルランの社会改革を労働組合運動の側から担い、1900年に労働高等審議会副議長に就任した。1904年ブルジュ大会では、比例投票制動議の提案者となり、革命主義の目的、戦術を批判し、1906年メーデーのゼネラル・ストライキ方針に反対した。1906年メーデーに際しては、実現可能な9時間労働日を目標とし、CGT の産業組合連盟の中では、もっとも組織的に運動を展開して、成果を誇示した。それを踏まえ、アミアン憲章に関して、ゲーディストによる CGT 支配を打ち砕くべく、グリフェールと提携して、採択に貢献した。最後に、グリフェール失脚、後継者ニエル選出に関与した<sup>6)</sup>。

本稿では、主に、B. ヴァンデルヴォルトによるバイオグラフィーに依拠して、グリフェールの足跡をたどり、クーフェとの関係を考察するとともに、ブルジュ大会直前の、両者の論争を検討する。クーフェ像の再構成

5) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.*

6) 拙著、前掲、参照。

を一步進めるものであるとともに、この時期の CGT における、革命主義とグリフェールの再評価にも資すると確信する。以下の順に考察を進める。まず、CGT 書記就任までのグリフェール、次いで、CGT ブールジュ大会、アミアン大会におけるクーフェとの関係、最後に、1904年7月29日におけるグリフェールとクーフェの論争。

## 第1節 グリフェール CGT 書記前史

### (1) 靴作り工、組合活動家グリフェール

V. グリフェールは、14歳で小学校をやめ、「父親の下で徒弟修業を積んだ」。父親は手押し車に靴を積んで、周辺の市から市へと売りに回る独立の靴作り職人であった<sup>7), 8)</sup>。当時のフランスにおいて徒弟制は、ドイツやイギリスに比べると制度として強固に確立したものではなかったとはいえ、事実上は労働者職業教育の根幹として広くいきわたっていた。その際、他人の下で、3年から5年程度、若干の手当てをもらいながら、修業をするというのが一般的であったが、父親の下でという事例も少なくはなかった<sup>9)</sup>。

17歳で3年間の徒弟修業を終え、遍歴を始める。最初の到達地ポルドー

---

7) B. VANDERVORT, *Victor Griffuelhes, op. cit.* pp. 2-3. ヴァンデルヴォルトは、中等教育を受けられなかったことが、「トラウマを与えた」と推測し、後に、中産階級知識人に対する反発となったとする。トラウマについて根拠が示されておらず、徒弟修業が中等教育の一面を持っていたことを考え合わせるべきである。

8) 20歳近く年上で、職業は異なるが、A. クーフェも、同じく14歳から植字工の徒弟修業を始めている。拙著、前掲、参照。

9) 拙稿「20世紀初頭フランスにおける「徒弟制度の危機」—労働審議会調査『徒弟制』（1902年）の検討を中心に」『企業研究』第5号、2004年10月、「20世紀初頭フランスにおける従弟制、理念、制度、実態：フランス労働局1899～1903年調査の検討」『商学論纂』第50巻、1・2号、2009年2月、参照。

で一靴店の仕事を得たが、長時間労働と低賃金に疲れ、数か月でさらに放浪に出、ナント、プロワ、ツールを巡る<sup>10)</sup>。ボルドーで、「注文靴作り職人の秘密協会」compagnonage に加盟したことも注目される。19歳で、同じ靴作り工の兄が住んでいたパリに定住し、一年間の兵役の後、サン・トノレ街の高級靴店のための靴作り工となる。この職業の労働者のエリートであり、「仕事場の規律と親方の監視を離れて自宅で仕事をし、豊かな顧客のためにブーツや靴だけを作った」。「皮の異なる組み合わせ、新しい仕上げの革新と経験を期待され、それぞれのシーズンのスタイルとファッションに従わなければならなかった」<sup>11)</sup>。

以上の略歴からも、グリフェールは徒弟修業を経た熟練工であり、さらに、遍歴修業、独立した仕事に示されるように、熟練職人的性格すら帯びたそれであった。1891年のボルドーでは靴作り工の45%が自宅で働き、1896年のパリでも20,000人中8,000人が自営であった。しかも、工場制生産が始まってはいたが、パリでは、高級靴製造は衰退せず、1890年代から1914年にかけて高級靴工が1,200人から2,000人に増大している。したがって、いわゆる「熟練の解体」状況にあったとは言えない。ただし、親方靴作りになる道はほぼ閉ざされ、低賃金、長時間労働に苦しめられていた。ボルドーでも、靴作り工は最下層の住民であった<sup>12), 13)</sup>。一方での「熟練工」、あるいは「熟練職人」としての自覚、帰属意識と、他方での過酷な

10) グリフェールを紹介する『時の人』誌は、「今日このような放浪はほとんど見られなくなった」とする。兵役の際に、ロゼールやピレネーから来た農民たちから、この放浪とかかわって、いくばくかの尊敬の目で見られたとも。Cf. *Les Hommes du jour*, *op. cit.* 書籍労働者の場合、組合が仕事探しの際の viaticum (路銀) の制度を維持していた。拙著、前掲、参照。

11) B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 4-7.

12) B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 6-9.

13) Cf. *Les Hommes du jour*, *op. cit.* 「小さな靴屋に雇われ、不十分な賃金と、過度な労働という、いつもの同じ条件で仕事をした」。

労働条件、貧困な生活、これが、グリフェールの組合活動の出発点となり、その生涯を貫く体験であった。組合専従となった1899年から日常的には仕事をやめたが、家計の必要な際には、針を持ち、アミアン大会の期間中にもそうであったとのエピソードはグリフェールの靴作り工への強い帰属意識を示唆するものである<sup>14)</sup>。

グリフェールは、1896年に、ほぼ同時に、組合活動と政治活動に入った。両者は切り離せないものであり、それは、フランス靴工組合がブランキスト活動家によって始められ、その支援を受けた組合という事情に拠った。E. ヴァイアンを指導者とするブランキストは、1893年のフランス皮革労連設立に貢献し、靴工組合、一般に皮革工組合の統一と、産業組合化のために主要な役割を果たした。職人的過去よりも、プロレタリア的未来を志向し、当時、社会主義的フラクションとして唯一、産業組合、組合の独立を擁護したことが、若い組合活動家にとって魅力的であった<sup>15)</sup>。グリフェールは、アルマヌ派(革命的社会主義労働者党)を評価しながら、コンミュン戦士の伝統が労働運動を妨げていると確信し、そこから離脱したブランキストに加わった<sup>16), 17)</sup>。1899年に、セヌ県組合連合靴工組合代表、すぐに、同連合書記、さらには、全国皮革労連書記と、急速に頭角を現した。1900年には、パリ市会議員選挙に立候補し、積極的にブランキストとしても活動している<sup>18)</sup>。

14) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 7., E. DOLLÉANS, *op. cit.* p. 125.

15) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 18-20.

16) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 16.

17) 『時の人』誌も、1896年に、ブランキストの党に加盟し、3年間そこにとどまるとする。Cf. *Les Hommes du jour*, *op. cit.* メトロソ辞典によると、早くから兄アンリが指導するセヌ県靴工組合の活動に積極的に参加し、1896年ごろブランキスト党に加わり、パリの靴工たちの中で確かな人気を獲得した。Cf. J. MAITRON, *op. cit.* ブランキストとのその後の関係についてはどちらも言及せず、ヴァンデルヴォルトも明らかにしていない。

この時期のグリフェールについて、旧コンミュン戦士でブルース派に属していたドゥラクール<sup>19)</sup>と親しく接し、その影響を受けていたことが見落とせない。ドゥラクールは彼に、書物やパンフレットを貸し与え、新聞を読むことをすすめて、フランスの労働運動に関する体験を話した。グリフェールが知識一般を軽視し、読書をしないとされ、後に自身が、ブルジョワ的理論家の影響を否定するが、彼のキャリアを見ると、書物と読書への関心を示す多くの証拠があり、それはこの時期にドゥラクールの影響下で培われていたのである<sup>20)</sup>。

ヴァンデルヴォルトは、グリフェールを「生まれつきの演説家、宣伝家、生まれつきのストライキとデモンストレーションの組織者であると」<sup>21)</sup>する。それは、後のCGT指導者としての輝かしい活動を形容するにはふさわしく、また、グリフェールに対して多くの同時代人、後世の人々が抱くイメージとも合致する。しかし、彼の前史ともいうべきこの時期に関するヴァンデルヴォルトの叙述からは、その片鱗は、まったくと言ってよいほど見出せない。熟練工としての強い自覚と、対照的に過酷な労働、困難な生活への怒りを見てとることはできるが、組合・政治活動に関しては、極めて慎重な一面を示している。興味深いのは、同時代の『時の人』誌における次の指摘である。「21歳になるまで、グリフェールはそれほど激しくは争わなかった。すでに我が国の首都における労働者の状況に

18) 最初で、最後の立候補。5,674票中582票という惨憺たる結果。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 43.

19) B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 22. 自学自習の製本職人。1893年に6区で、小さな社会主義者図書室の立ち上げに協力。ブルース派は、労働党内で議会活動に傾斜し、アルマヌ派と対立。

20) B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 21-23.

21) B. VANDERVORT, *op. cit.* p. xi. Cf. E. DOLLÉANS, *op. cit.* p. 118. Cf. J. MAITRON, *op. cit.*

年表 I CGT 書記前史

1874年	ロ・エ・ガロンヌ県ネラック生まれ
1888年	14歳で学校をやめ、父の下で靴工の徒弟修業
1891年	17歳からボルドー、ナント、プロワ、トゥールで遍歴修業
1893年	パリ定住 1年間の兵役の後、サン・トノレ街の高級靴店のための靴作り工
1896年	フランス靴工組合加入 ブランキスト党加盟
1899年	社会主義者大会に代表として出席 セーヌ県組合連合靴工組合代表 同連合書記 全国皮革労連書記（～1905年）
1900年	パリ市議会議員立候補 落選

については極めてはっきりした観念を持っていたが、ためらいからか、役を果たすのに熟していないと判断したからか、あえて宣伝家に身を投じようとしなかった」<sup>22)</sup>と。後の神話を否定する、読書を通じた教養の獲得、慎重な組合、党活動が、彼の将来を準備したのである。これまでの略歴を年表 I に整理しておく。

## (2) ミルラン主義をめぐるクーフェとの前哨戦

1899年に成立したワルデック・ルソー政府は、ドレフュス支持に集まった社会主義勢力をも取り込んで、共和国擁護を掲げ、穏健な独立社会主義派に属するミルランを入閣させ、その労働政策を通じて、労働組合を、ひいては労働者をひきつけ、社会平和をもたらそうとした。ゲーディストとブランキストを除く、社会主義諸派の多くが共和国擁護政府を支持し、ミルラン入閣に理解を示した。CGT 委員会と、傘下の改良主義的労働組合指導部も、ミルラン改革に期待を寄せた<sup>23), 24)</sup>。これに対して、元々、ドレ

22) Cf. *Les Hommes du jour*, *op. cit.*

23) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 25-30.

フュス事件に対して冷めた態度をとっていたグリフェールは、ドレフュス事件が、労働者の関心をそらすものであるとみなし、さらに、ミルラン入閣に強く反対した<sup>25), 26)</sup>。世紀転換期フランスにおいて、ようやく大不況が終息し、ストライキが活発となり、成功率も高まり、ゼネラル・ストライキによる革命への展望が生まれ始めていたのである。

ミルランによる労働改革プログラムは、以下のものを含んでいた。

- ① 労使紛争の強制仲裁法：仲裁が不成立の場合のみストライキを認める。
  - ② 労働組合への法人格付与。③ 全国政・労・使協議会としての労働高等審議会の活性化、地方労働審議会設置。
  - ④ 女性、児童10時間労働日法<sup>27)</sup>。
- グリフェールは、その目的が、1884年法と同様に、労働組合を政府が掌握し、彼らを国家、したがって雇用主により近く結び付け、革命的組合主義を排除することにあるとみなし、反対の姿勢を示した<sup>28), 29)</sup>。これこそが、

24) Cf. J. JULLIARD, *Les Gauches Françaises, op. cit.* p. 465. 1899年12月3日～8日の社会主義者集会において、ミルラン入閣をめぐる論争が生じ、ジョレスが賛成、ゲードが反対した。818対634で次のゲード案、「階級闘争は、社会主義者のブルジョワ政府への入閣を認めない」、が採択された。

25) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 25. グリフェールによると、ドレフュス事件に際して、社会主義者の大部分は、ドレフュス大尉と共和国を守るために温和なブルジョワジーとの同盟に走った。労働者にもっと大きな将来性をもたらすはずの、成長しつつあるストライキ運動を犠牲にして。

26) 『時の人』誌によると、グリフェールは、1899年に l'Union des syndicats の書記に任命され、この資格で、共和国の勝利の日に、ナシオン広場でのデモ行進に加わったが、仲間の圧力で関わっただけである。Cf. *Les Hommes du jour, op. cit.*

27) ミルラン改革、労働高等審議会については、Cf. Isabelle LESPINE-MORET, *L'Office du Travail 1891-1914. La République et la réforme sociale.* 2007.

28) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 27-28. 反ワルデック・ルソーの闘いは、グリフェールの CGT 指導者としての精神的正当性の源泉となった。彼だけが最初に戦ったことを周囲に思い出させ続け、内閣が倒れてからも第一次世界大戦後までミルラン主義との闘いを続けた。

「グリフェールが、7年間のわずかな組合の経験の後に、27歳でCGTのトップに上り詰めた特別な偉業」を説明するものであった。

グリフェールは次のように言う。「社会平和を守るために、国家は粗野な力を使う準備をしていたが、労働者活動家の協力を得、合法的枠組に彼らの活動を制限するよう納得させることを試みることによって、労働者組織に勝利することを好んだ」。この任務が、労働運動内部にコンタクトと同盟者を持つ商工大臣ミルランに委ねられた<sup>30)</sup>。同盟者である、改良主義組合指導者の一人が、1891年設置の労働高等審議会に最初から参加し、1900年にその副議長となったA.クーフェであった。後のCGTにおけるグリフェールとの争いの小さな前哨戦が生じた。それは、セヌ県組合連合での出来事であった。7年後のアミアン大会でのグリフェールによる回想。「ミルランが就任するやいなやクーフェ、ボーメ、モロールらが支持決議を提案し、セヌ県組合連合はミルランのための宴会を決定した。私一人が反対した」。この宴会のアイデアはA.クーフェによるものであった。若いグリフェールと、すでに1899年までに、強力な組合の書記長を15年間務めていたベテラン活動家であった印刷工の大物との出会いである。「彼（グリフェール）は立ち上がり、決定的な数語でクーフェの提案をはねつけた。クーフェは彼のアイデアを追求しようとはしなかった」。翌年、ミルランからの宴会招待があり、当初、反対は少なかったが、グリフェールの努力で徐々に広がり、1900年7月に拒否が決定された<sup>31), 32)</sup>。

---

29) Cf. *Les Hommes du jour*, *op. cit.* 政府の目論見は、革命的運動を挫き、組合を改良主義の道に突き落とすことであった。そのために、クーフェ、ブリアら労働者の偽の友人を当てにした。グリフェールは、組合に対する政府の計画にもっとも勇敢に対決した一人であった。

30) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 47.

31) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 37-38. アルマニストに指導されるCGTの二つの有力な組合、鉄道労組と建築労連が労働高等審議会に代表を選出し

## 第2節 CGTにおけるグリフェールとクーフェ、 対抗から協調へ

1901年11月26日グリフェールは、鉄道労組のゲラルを引き継ぎ、27歳でCGTの書記に就任した<sup>33)</sup>。1902年から1904年にかけて、「直接行動」、「ゼネスト」を核とする革命的労働組合主義を確立し、1904年ブルジュ大会で、クーフェと真っ向から対立し、1906年アミアン大会で妥協することになる。

### (1) グリフェールによる革命的労働組合主義の確立

1902～1904年が、グリフェールの8年間のCGTの梶取りにおけるもっとも建設的な期間であった。組合組織の面では、1902年モンプリエ大会において、懸案であったCGTと労働取引所全国連盟の合同を実現した。それは、社会変革の手段としてゼネラル・ストライキを強調したF.ペルチエの思想を継承してCGTの方針に取り入れるとともに、各地の労働取引所に結集する組合活動家、運動を糾合し、CGTを活性化するものであった。組合運動の指導に関しては、パ・ド・カレ県炭鉱夫大ストライキ、ノール県繊維工業ストライキ・暴動に関わり、その中で、直接行動、ゼネラル・ストライキをCGTの方針として固めるとともに、改良主義者、議会

---

た。鉄道労組代表はグリフェールの前任CGT書記ゲラル。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 48.

32) Cf. *Les Hommes du jour, op. cit.* グリフェールは、1899年6月にl'Union des syndicats に出席。ある日書籍の大立者クーフェは、彼の仲間に省での（ミルランのための）宴会を提供することを提案した。グリフェールは、立ち上がり、強い言葉でクーフェの提案に反対した。

33) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 54. 彼が所属し書記を務める全国皮革労連の候補者で、他に對抗馬はいなかった。

主義者との激しい闘争を通じて、この革命的労働組合主義の旗印を鮮明にした<sup>34)</sup>。

労働取引所は、19世紀末に生まれたフランスに固有の組織、運動である。名称の通り、労働者の就職斡旋、情報交換のために、各地の市当局が労働組合の要求に基づいて、場所を提供し、場合によっては補助金も出した。形成期の労働組合にあっては、会合のための会場確保は大きな課題であり、公的資金でそれが得られることは、組合運動の発展に貢献した。アナーキストから転じたF.ペルチエが革命的ゼネラル・ストライキを掲げ、その全国組織をまとめ上げ、CGTが停滞するのに対して、労働組合運動の活性化を牽引した。両組織の統合が課題とされたが、ペルチエは、教育機能と組織機能という両組織の性格の違い、ブランキストが労働組合運動支配を目指しているとの疑いから抵抗した<sup>35)</sup>。グリフェールは、当初、ブランキストの方針に忠実に労働取引所運動を評価していた。しかし、パリの労働取引所補助金をめぐる混乱から、労働取引所が補助金によって地方当局や公権力に結び付けられることの危険を認識し、CGT優位の融合を方針とすることになった。1901年のペルチエの死によって、障害がなくなり、1902年モンプリエ大会において、両組織の合同が実現された<sup>36), 37)</sup>。

「1902～1904年に彼は活動があるところにいつもいた。1902-1903年のパ・ド・カレの炭鉱夫の将来をめぐるイデオロギ的十字砲火の真ただ中に。1903年のアルマンティエールの繊維労働者の暴力的ストライキの間の街頭に。このような行動主義は、パリを離れず、ストライキの場に行か

34) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 56-57. 喜安朗, 前掲書, 第7章「ゼネラル・ストライキ論の諸様相」参照。

35) G. ルフラン『フランス労働組合運動史』谷川稔訳, 1974年, 28-30ページ, 参照。Cf. E. DOLLÉANS, *op. cit.* pp. 33, 45-46.

36) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 58-60.

37) Cf. E. DOLLÉANS, *op. cit.* pp. 55-56., M. DREYFUS, *op. cit.* pp. 38-40.

ない、以前のCGTのリーダーの特質ではなかった」<sup>38)</sup>。この数行に、ヴァンデルヴォルトのグリフェールへの思いが込められている。

パ・ド・カレ県炭鉱夫ストライキに関する経過は以下の通りである。10月から11月初めにかけて「フランス労働史上最初の全産業ストライキである」、大規模な炭鉱夫ストライキが起こった。社会主義者下院議員で鉱夫組合議長であったバズリーによる取束の試みに対して、少数派がストライキ継続を主張したが、軍隊・警察と衝突して抑圧され、ストライキの解除、敗北となった。グリフェールが指導、介入するのはここからであり、その目的の一つは少数派を支援して、鉱夫連盟を革命主義に取り込んだうえで、CGTの傘下に収めることであった。数年にわたる紆余曲折を経て、1906年6月に鉱夫連盟が統一され、10月にCGT加盟が実現された。ただし、バズリーらは追い出されたが、指導部のメンバーは改良主義者の手に握られることになる<sup>39)</sup>。いま一つの目的は、このストライキから教訓を引き出すことであった。グリフェールは、1902年12月14日から17日に主要炭鉱町を巡り、ゼネラル・ストライキについて語りあい、その可能性を確信するとともに、炭鉱夫が職業的エゴイズムに支配され、他の産業、とりわけ金属工業との連携、ストライキの波及をなしえなかったことに敗北の原因を見出した<sup>40)</sup>。

1903年10月にアルマンティエールから始まり、ノール県全体に広がり、40,000人以上の繊維工業労働者を巻き込んだストライキが生じ、ゲード派のルナルが、県知事を介入させ労使委員会設置で解決しようとした。急

---

38) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 57. 他にも以下のものが挙げられる。私的就職斡旋事務所廃止の全国闘争（1903年）。南部地方の農業労働者のストライキ（1904年）。

39) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 64-74.

40) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 62-63, 66.

進派がゼネラル・ストライキを宣言して対抗し、彼らを支援するために、グリフェールはCGTゼネラル・ストライキ委員会の代表として、10月12日に現地に赴いた。到着以前、10月2日に、「第一次世界大戦前のフランスで最も暴力的な労働騒擾」とみなされる暴動が生じていた。グリフェールは、ストライキを「長期にわたり形成された怒りの下での、労働者の自発的立ち上がり」とみなし、暴力についても「自発的なもの、民衆の反乱」と見た。結局、ゲーディストと改良主義者の主導によって、11月4日ストライキは終了した<sup>41)</sup>。

ヴァンデルヴォルトは、「V. グリフェールによる1902～1903年のパ・ド・カレ、ノール県急襲はCGTの全国的存在意義を初めて示した。地方のストライキ指導者たちはパリに急電を打てば、グリフェールかその副官の、ストライキ支援のための派遣を当てにすることができる」と評価した。グリフェールは、CGT委員会の権限を強め、全国の労働組合運動の先頭に立つスタイルを確立した<sup>42)</sup>。

上記事件は、グリフェールの類まれなストライキ指導者、組織者としての資質を示すものとされている。しかし、まず、厳密に、冷静に見るとグリフェールはストライキを指導していると言えるのか。我々は、A. クーフエのストライキ指導について二つの事例を考察した。一つは、ニームにおいて、経営者との交渉が決裂し、回避が不可能となった時点で、現地の組合指導部とともにストライキを決定し、しかし、組合内の動揺から中止を選択したものの。いま一つは、パリの一大商会でのストライキに関して、当事者であるパリ支部と対立しながらも、ストライキの金銭的支援の方法と、何らかの収束を模索したものである。決行するか否かの決断、継続と収束のための尽力が見られた<sup>43)</sup>。当時、CGT委員会はこのような形でスト

---

41) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 76, 80, 82.

42) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 83.

ライキを直接指導、支援することはできず、グリフェールが行った精神的支援が限界であり、それをストライキ指導と言えなくはない。しかし、グリフェールはどちらの場合も、収束については全く考慮せず、ストライキの継続を煽り、ゼネラル・ストライキへの発展を願望しているだけのように見える<sup>44)</sup>。

次いで、介入の主要目的にさえ見える、改良主義者との闘争<sup>45)</sup>に関しても、組織者として必ずしも成功を取めたとは言えない。鉦夫組合に関しては、人格的に問題のあるブルチューを重用し、不信を招くことになった。繊維労働者ストでも、現地の状況を十分に考慮せず、外部からの介入、暴力教唆との批判にうまく対応できていない<sup>46)</sup>。また、CGTの方針としてゼネラル・ストライキの表明や、暴動の肯定は、当面、極左主義者の支持を得たが、後に、それに手を縛られることになる。書籍労連中央委員会において、孤立しながらも、多数を占める革命主義アルマヌ派と粘り強く対峙し、最終的にアルマヌを自滅的な退場に追い込んで主導権を確立したクーフェと比較されるべきである<sup>47)</sup>。

## (2) プールジュ大会における V. グリフェールと A. クーフェ、全面対決

1904年9月12日～20日のCGT プールジュ大会は、グリフェールの腹心、

43) 拙著、前掲、参照。

44) ヴァンデルヴォルトの叙述からは、CGT書記以前に、パリ靴工組合、全国皮革労連の責任者としてストライキを現実に指導したことが見て取れない。メトロン辞典、『時の人』誌に関しても同様である。

45) Cf. J. MAITRON, *op. cit.* 彼は改良主義者の陣営の中枢部と闘った。鉦夫の大連合の改良主義的社会主義者の指導部を倒すために、「若い組合」の努力に明瞭な支援を送った。また、繊維労連において、ゲーディストの書記ルナールに反対するアナーキストの少数派の反乱を励ました。

46) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 69, 81-82.

47) 拙著、前掲、参照。

副書記の E. プージェが言うところの、フランス史上、もっとも重要な組合大会であった。労働組合のどの流れが労働者の熱望にもっともよく応えるか、改良主義か、革命主義かという、労働者階級が直面していたもっとも重要な問題に取り組んだからである。クーフェを含む主要な改良主義の指導者たちは、グリフェールと革命主義の力が多数の小組合の支持に拠っていると考え、大会での投票に関して、一組合一票制を、組合員数に応じた比例投票制に代える動議を提出し、革命主義的多数派の支配に挑戦した。結局、822対388 棄権 1 で、この動議は否決され、彼らは、決定的な票差で敗れた<sup>48), 49)</sup>。

この評価を一応肯定したうえで、クーフェの立場から問題を検討してみよう。まず、クーフェはこの動議の可否についてどのような見通しを持っていたのか。この投票制度は、すでにリヨン大会、モンプリエ大会で提起され、それぞれ26票と、76票で否決されていた<sup>50)</sup>。大動員をかけたとはいえ、すんなり通るとは考えにくい状況であった。関連して、822対388という票差を、改良主義の決定的敗北と言えるのかどうか。これらを考えるうえで、プールジュ大会以前に、CGT 指導部からの攻撃に対して、書籍労連が反撃し、対立が激化していたことを重視しなければならない<sup>51)</sup>。書籍労連からすると、問題は、CGT 指導部が革命主義であることとともに、加盟組合内の革命主義がおおられ、組合の破壊につながることであった。さきに検討した、炭鉱連盟、繊維組合に対するグリフェールの介入も、そのような性格を持つとみなされていた。したがって、クーフェからする

48) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 84, 97.

49) これは通説と言ってよい。Cf. M. DREYFUS, *op. cit.* p. 43.

50) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 87.

51) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 86. 革命主義者が、『直接行動』*L'Action directe* 紙を利用して、とりわけ改良主義のボスであるクーフェを批判したことが指摘される。

と、まずは、書籍労連への攻撃、内部介入をやめさせ、書籍労連の自立性を確保することが課題であり<sup>52)</sup>、CGT 指導部そのものを革命主義者の手から奪取することは、次の目標であった。比例投票制動議の支持をモンプリエ大会から飛躍的に増大させ、加盟組合票の 1/3 弱を獲得したこと、投票制度の在り方いかんでは、多数派が移動する可能性を示したことは、グリフェール指導部を牽制するうえで十分な数であった<sup>53)、54)</sup>。

いま一つ、ブルジュ大会を特徴付けるのは、1906年メーデーにかんする方針、8時間労働日、週6日労働の全国キャンペーン、1906年5月1日にCGTメンバーのいるすべての産業で8時間後の仕事をやめ、雇用主が譲歩するまで戻らないとの、ゼネラル・ストライキの採択であった。クーフェの、9時間労働日の段階を踏むべきとの主張は退けられたが、書籍労連の独自方針は黙認された<sup>55)</sup>。

これとかかわるヴァンデルヴォルトの次の指摘は、見落とせない。「グリフェールは、固定的な時間表とオールオアナッシング的響きを持つこのキャンペーンの妥当性に疑問を持っていた」。「8時間労働日のための闘争には、労働者と公衆の事前教育が必要であると認識していた。このようなキャンペーンはCGTによってすでになされたよりも大きな組織的努力を必要とするであろう。組織、宣伝のためのマンパワーがあるか、リーフレ

---

52) 次節で検討する *Les deux méthodes syndicalistes* 公表にあたって、書籍労連中央委員会は、CGT 委員会に宛てた手紙を取り上げ、そこで、次のように要求する。「我々は、他の加盟組合と同様に扱われる権利を持つ」と。書籍労連に対する攻撃、介入の中止を求めることが最優先課題であった。

53) 書籍労連内でのアルマーヌとの抗争の経過を見ると、このようにみなすことは妥当性を持つ。拙著、前掲、参照。

54) ヴァンデルヴォルトは、この可能性があったかどうかを詳しく検討して、否定し、改良主義者の敗北とする。しかし、可能性が問題になるだけで、牽制には十分である。

55) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 98-99.

ット、ポスター、さらには政府との衝突が必然化する弁護士費用の十分なお金があるか。「しかし、部分的には、提案者であるプージェにせつつかれて、保留付きでグリフェールは8時間労働日闘争のアイデアには賛成した」<sup>56)</sup>。この指摘は、グリフェールの慎重な一面を示すとともに、冒険主義とも言える勢力との見解の相違、対立の要素を予測させるものとして興味深い<sup>57)</sup>。さらに、運動の組織性の必要を強調する点では、クーフェとの近さを見てとれ、後の両者の妥協について考えるうえで示唆的である。

### (3) 1906年アミアン大会 妥協、協調

CGTアミアン大会は、ながくフランス労働組合運動の旗印となるアミアン憲章の採択で歴史に名を残すことになり、また、その提唱者グリフェールの最大の栄誉となる<sup>58)</sup>。革命的労働組合主義と、組合の政党からの独立を確立したとして称揚されてきた<sup>59)</sup>。しかし、なぜ1906年にそれが提案されたのか、いま一つの大会の主要課題である1906年メーデーの総括とど

---

56) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 98. アミアン大会における1906年メーデーの総括に関しても同様の指摘がされる。「最初に提案されたとき、彼はこのキャンペーンにそれほど熱中しはしなかったけれど、プージェによってそれを支持するよう意見を変えさせられた。組合員に達成されうよりも多くが約束され、結果が大きな期待に反したとき、幻滅と精神的敗北の危険があることを恐れた。彼は、さらに、このキャンペーンがいくつかの地区では革命への前哨とみなされ、より大きく危険な誤った希望を掻き立て、CGTがまだそれには十分強くないのに政府との暴力的衝突の機会を大きくするのはとも疑ったようである」。 *op. cit.* p. 119.

57) プージェとグリフェールの関係の考察は別の機会に譲らざるをえない。 Cf. E. DOLLÉANS, *op. cit.*

58) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 122. なお16年間の生涯を残すにもかかわらず、アミアン憲章の人として記憶されるであろう。

59) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 121. CGTアミアン大会は、フランスの革命的組合主義の歴史において、さらに、フランスの労働組合史全体においても、長らく、極めて大きな影響力を持つ。

う関わるのかについては、明らかにされてこなかった。ヴァンデルヴォルトは、「アミアン大会を革命的労働組合主義の頂点と見、アミアン憲章をその聖典と見ようとした」ドレアンのようなフランスの初期労働史家を批判して、この問題に取り組む<sup>60)</sup>。

1906年メーデーは、クレマンソーによるCGT指導部逮捕、軍隊のパリ街路制圧下<sup>61)</sup>で、パリ、地方合わせて15万人のストライキ参加者を見た。これについて、グリフェールとCGT指導部は、積極的評価を下した。アミアン大会に提出された報告によると、改良主義者の妨害にもかかわらず、参加者が予想されたよりも多く、フランスで最初の全国的ストライキであり、ブルジョワジーに労働者階級の力を知らしめた。目的の達成に成功したか否かは問題ではなく、精神的勝利であったと<sup>62)</sup>。注目すべきことに、ヴァンデルヴォルトは、この評価が、グリフェールの個人的判断に合致するのかとあらためて問い直す。これ自体、公式見解の説得力に疑問を投げかけるものである。失敗との判断がありうる根拠として、CGT指導部が、ゼネラル・ストライキの成果への失望から、いくつかの組合における組合員の減少を心配し、1907年には8時間労働日キャンペーンを行わないことで一致したとの警察報告をあげる<sup>63)</sup>。また、8時間労働日を勝ち取

60) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 143., E. DOLLÉANS, *op. cit.* p. 135.

61) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 111-113. クレマンソーは、5月6日の国政選挙を控え、パ・ド・カレ県、ノール県の騒乱、それがメーデーにつながることを見過ごすことはできず、CGT指導部の逮捕を決断。この動きをまったく予見していなかったグリフェールはブージュェらとともに4月30日に逮捕され、5月6日に釈放された。

62) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 117. 93組合がストライキに参加。最多は金属労働者。宝飾労働者、パリの印刷工は5月1日以降も数週間にわたってストライキを継続。

63) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 116-119. また、CGTのメーデーに関する努力の惨めな結果は、多くのアナーキスト組合活動家に大きな衝撃を与

れず、大きな出費を強いられ、ブルジョワジーに不必要な恐怖を与え、弾圧に結果したことから失敗であったとする、多くの歴史家の評価も紹介する<sup>64)</sup>。そのうえで、15万人が呼びかけに応じたのは予想以上であり、CGTの精神的権威を高めた点で、グリフェールが確信を持っていたと結論する<sup>65)</sup>。この問題提起によって、ヴァンデルヴォルトは、グリフェールらCGT指導部が、ブルジュ大会以来の改良主義批判を停止して、アミアン大会において、妥協、協調に転換したのはなぜかとの問題に接近した。しかし、グリフェールによる精神的勝利の強調が、とりもなおさず、成果獲得の点での失敗、自身が危惧した準備不足を認めることであったという事実を目をふさいでしまった。それは、改良主義者による妨害を指摘するだけで、書籍労連の闘争成果を無視することにもつなげた。

R. レベリユーによると、クーフェに指導される書籍労連は、8時間労働日ではなく、9時間労働日を当面の目標とし、闘いに備え、1905年7月1日からストライキ資金の徴収を始めた。4月18日を闘争の開始日とし、ストライキなしで、136の都市で成功を勝ち取り、62の都市で1日から2か月以上のストライキを実施して成果を上げた<sup>66)</sup>。また、ドンプレによる

---

え、……ブージュ、グリフェールらによって誤って指導されたと思った。CGTのリーダーシップの強い支持者である金属工業労働者も失望していたとの警察報告が紹介される。*op. cit.* p. 128.

64) Cf. M. DREYFUS. *op. cit.* p. 53. 1906年メーデーについて、CGTは1年以上前から準備してきた目的を達成できなかったことを認めざるをえない。成功か、失敗か？ CGTは初めて、統一された指令に基づく全国的ストライキの波を促し、労働者や公衆に8時間労働日問題への関心を高めた。精神的高揚をもたらし、いくつかの部門で（書籍、建築、宝飾）賃金や労働条件の改善を獲得した。しかし、相対的失敗と言われうる。

65) 1906年メーデーの積極的評価に関しては、上村祥二、前掲論文、喜安朗、前掲書、第9章「1906年メーデー」参照。

66) Cf. M. REBÉRIOUX, *Les ouvriers du livre et leur fédération. Un centenaire 1881-1981*. 1981. p. 122.

と、アミアン大会において、クーフェは、「書籍によって獲得された結果を報告し、他の労連の極めて貧しい結果と比較した」。こうして、「8時間労働のための運動は継続されること、しかし、採用すべき手段については各連盟のまったくの自由とされることが決定された」<sup>67)</sup>。どちらも、書籍労連の側に立つ評価であるが、二つの闘争が対比されることは自然であり、クーフェが卓越した闘争指導者であることを示したのに対して、グリフェールが当初思い描いた構想を実現しえなかったことは明瞭である<sup>68)</sup>。すでに指摘したように、J. ジュイアルは、失敗であったというだけではなく、書籍労連の組織的闘争、成果の獲得を見せつけられ、グリフェールが屈辱を味わい、改良主義への移行が始まったとしている。「屈辱」の当否は確かめようがなく、彼の大会報告はすんなり承認された<sup>69)</sup>とはいえ、これ以降、1906年方式でのメーデー・キャンペーンは放棄されるのであり、改良主義的闘争方法も黙認せざるをえなくなり、事実上の方針転換がなされたことは否定できない。

後に、アミアン憲章と呼ばれることになるグリフェールの動議は、それまでの革命的労働組合主義の承認と労働組合の政党からの独立を主な内容としていた。二つの動議が、これに対抗して出された。一つは、ゲーディストのルナルによるもので、前年、社会主義者を統一したフランス社会

67) Cf. R. DOMBRET, *La Fédération Française des Travaillleurs du Livre (1881-1966). Quatre-vingt-cinq ans de vie et de luttes*. 1966. p. 41.

68) レベリューは、CGT 指導部による1906年メーデーの準備は、取るに足らないもの、ほとんどないという状況であったのに対して、クーフェは、ブルジュ大会で、「8時間労働日は望ましい改良ではあるが、願望を表明するだけでは十分ではなく、実現する手段を示さなければならない」と述べ、その時から細心の準備に取り掛かったとする。Cf. M. REBÉRIOUX, *op. cit.* p. 122.

69) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 128. 3日間の討議の後、781対115（棄権21、投票拒否10）で採択された。

党との緊密な関係を打ち立てること、実質的には、ドイツにならって政治闘争は政党、経済闘争は労働組合という任務分担を主張した<sup>70)</sup>。グリフフェールはいち早くこの動きを察知し、社会党内のゲード派と対抗するためにジョレスとの提携を模索していた<sup>71)</sup>。いま一つは、クーフェによる改良主義者を代表する動議であった。クーフェは、あらゆる政治党派からの独立を主張し、一方で、ルナル動議に反対するとともに、他方で、アナーキストのCGT指導部への影響を批判した<sup>72)</sup>。結局、書籍労連が、ゼネラル・ストライキに保留を表明したうえで、動議を撤回し、グリフフェール支持に回り、830対8（棄権1）で可決された<sup>73)</sup>。

このアミアン憲章をめぐる大会での議論については、これまですでに多くの論及があるが、アミアン憲章神話にとらわれ、なぜグリフフェールはこのような動議を提出したのか、また、革命主義者と改良主義者、その代表であるグリフフェールとクーフェはなぜ妥協したのかという、重大問題が見落とされてきた。ヴァンデルヴォルトは、以下の叙述に見られるように、CGT指導部の妥協的姿勢を指摘する。アミアン憲章について、「CGT内部では、連盟内の改良主義的右翼と、アナーキスト反乱的左翼との調整の

---

70) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 121. ゲーディストは、彼らがメーデー・ストライキの失敗と見なすものを利用して、CGTをフランス社会党(SFIO)のコントロール下に置こうとした。

71) B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 126. アミアン大会1か月前にカルモーにおいて、ジョレスの主宰する宴会でスピーチをした。実質的には社会党内のジョレス派に手を差し伸べた。

72) B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 135. とりわけ反軍国主義、反愛国主義を問題視した。

73) 三つの動議、アミアン憲章の主な内容については、H. デュビエフ 前掲書 参照。なお、J. ジュイアールがアミアン憲章100年にあたって、アミアン憲章のテキストの詳細な再検討を試みている。Cf. J. JULLIARD, *La charte d'Amiens*, *op. cit.*

役割を帯びた」。「アミアン精神は、CGT内での改良主義者との継続的闘争におけるつかの間の休戦以上のものとは理解されていなかった」<sup>74)</sup>と。しかし、この妥協の持つ意味を探ろうとはせず、結局ゲーディストによる組合支配の危険性、とくに、ミルラン主義の復活から組合を守ることを強調するにとどまった<sup>75)</sup>。この点で、ジュイアールは、CGTの運動が転換点に差し掛かっていたことを指摘し、一つの明瞭な解答を与えている。すなわち、前の時代には、「革命的で収奪を目指すゼネラル・ストライキの慣例的祈りが、組合の綱領の代わりになっていた」。「巧みな戦術家であったグリフェールは時代が変わりつつあることを理解した。直ちに彼は、『社会戦争』La Guerre sociale誌の騒々しいジャーナリストであるG.エルヴェのような騒ぎ立てやの安売り政治と、前時代の革命的ロマンティズムを告発した」<sup>76)</sup>と。1906年メーデー、ゼネラル・ストライキを失敗とし、新しい方向性を打ち出す必要性を認識したことから、「憲章」を提案したとするのである。改良主義者と妥協、むしろ積極的に共闘しようとしたことも説明しうる仮説である。

クーフェの側からこの妥協、共闘はいかなる意味を持つのか。クーフェとグリフェールの以下のやり取りが注目される。クーフェは、「CGTが、アナキストと反議会主義煽動の機関になる権利はなく、どのような政治党派や哲学的組織との公式、非公式、一時的、恒久的関係も確立すべきで

74) B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 141, 143. なお、書籍労連からの見方として、ドンブレによると、「大会の雰囲気はブルジュのそれとはまったく異なっていた」。Cf. R. Dombret, *op. cit.* p. 41.

75) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 125, 130. ミルラン入閣当初、これを批判したゲーディストは、この時点では、その社会改革案支持に転換していた。

76) Cf. J. JULLIARD, *La charte d'Amiens*, *op. cit.* p. 12. アミアン憲章によって規定されるのは、改良主義的であると同時に革命的組合主義であり、それが、グリフェールによってと同時にクーフェによって採択されたとする。Cf. *op. cit.* p. 26.

はない」とする。これを、ヴァンデルヴォルトが、「クーフェによる CGT 革命主義的リーダーシップとの休戦のための、注意深い値段付け」とするのは、本質を突いている<sup>77)</sup>。クーフェは、一般的に政党、セクトからの、したがってゲーディストからの独立を主張して、妥協の姿勢を見せながら、返す刀で、反議会主義、さらには反軍国主義、反愛国主義を掲げるアナーキスト、極左と手を切ることをグリフュールに求めるのである。これに対して、グリフュールは、「クーフェが CGT 委員会内部のアナーキストの存在に拘泥しすぎているのであって、その数は彼が信じさせようとするほど多くはない」とする。彼は、革命的多数派の重要な要素を排除することなしに、改良主義者と和解しなければならなかったのであり、苦しい弁明である<sup>78), 79)</sup>。

したがって、アナーキスト、極左と手を切るとの言質は取らないものの、アナーキストのみならず社会党の G. エルヴェグループにとっても最重要課題となっていた反軍国主義、反愛国主義を明確な問題とすることによって、グリフュールのマヌーバーの余地を減らしたうえで、ゲーディストを排除する協調であった<sup>80)</sup>。さらに、革命主義に関しては、まず、それ

---

77) B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 135. 改良主義と革命主義の分離は、クレマンソーとのメーデー衝突において、組合を深刻に弱め、CGT の共通の目的を再興する必要があった。Cf. *op. cit.* p. 136. さきに見たように、この認識は、メーデー・キャンペーンの総括をめぐる議論に生かされていない。

78) クーフェの観点からは、反軍国主義、反愛国主義のキャンペーンは社会主義者の選挙運動と同じく労働組合への政治の侵入である。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 136.

79) ジュイアルは、改良主義的組合が1914年まで、忍耐強く、革命主義の後見を受け入れており、それは、当時のプロレタリアの現実に照応していたと信じたからであるとの興味深い指摘をする。Cf. J. JULLIARD, *La chartre d'Amiens*, *op. cit.* p. 32.

80) イフトによる反軍国主義、反愛国主義動議が、グリフュールの躊躇にもかかわらず提出され、488対310(白票49, 棄権23)で採択された。グリフュー

と並んで、日常的な改良闘争が公式に肯定された。資本主義の打倒、賃労働の廃止も抽象的で、将来の目標である限り、一致しうるものであった。次いで、戦術としてゼネラル・ストライキが掲げられたが、1906年メーデー総括で当面の課題からははずされた。実質的には、革命主義、グリフェールの側からの譲歩、ないし方針転換によるものであり、クーフェは、旧来の立場を堅持したうえで共闘ということになる<sup>81), 82)</sup>。

1909年2月、グリフェールは「CGT 商会」事件でCGT書記を辞任する。CGT事務所の購入のために、グリフェール名義の商会を設立し、その資金をブルジョワ社会主義者から借りたことである。彼の人となりを理解するうえで、それ自体として興味深い事件であり、ヴァンデルヴォルトも1章を当てているが、書記辞任の直接のきっかけではあっても、本当の原因は別にあると考えられること、クーフェの直接的関与の事実も挙げられていないことから、簡単に触れるにとどめる<sup>83), 84)</sup>。

---

ルは、大会の道徳的効果が完全に破壊されたと喜ばなかった。大会後、グリフェールと「反乱的左翼」との対立が現実化し、グリフェール退陣の一要因となる。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 142.

81) ジュイアールによる、ジョレスの総合、すなわち、短期的には改良主義、長期的には革命主義の指摘は示唆的である。Cf. J. JULLIARD, *Les Gauches françaises*, p. 472. この立場を受け入れるなら、革命主義者と改良主義者が共闘することは不自然ではない。

82) ヴァンデルヴォルトもこの点を認めている。「基本的に、ブルジュ大会での動議の再宣言であり、改良主義の立場は原理的でそこから変わるものではなかった」。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 135.

83) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* VIII REGINATION (1909) pp. 161-184. メトロ辞典では、「(グリフェールの商会設立は) 幾人かの活動家の労働者主義的感情とぶつかった」とされる。Cf. J. MAITRON, *op. cit.* アミアン大会からグリフェール辞任までの経過については、次の文献も参考に値する。Cf. Dominique ANDOLFATTO, Dominique LABBÉ, *Histoire des syndicats (1906-2010)*. 2011.

84) J. アルマーヌの書籍労連からの退場は、個人商会名義での印刷所設立に対

クーフェは、グリフェールの辞任、あえて言えば追い落としにどのように関わったのであろうか。ヴァンデルヴォルトは、一般的に、「グリフェールを譲位させたのは、アミアン憲章が向けられていた改良主義者と極左であった」とし、また、直接的に、ヴィランヌーヴ・サン・ジョルジュ虐殺事件への対応のための、1908年6月6日CGT指導委員会に関して、「改良主義者はCGTのコントロールを掴む機会を待っていた」とする。ヴィランヌーヴ・サン・ジョルジュ事件が、グリフェールの辞任に決定的な影響を及ぼしたことは明らかであるが、それはもっぱら、彼が「極左勢力」との関係を調整しえなかったことに起因している<sup>85)</sup>。さらに言えば、アミアン大会以降のグリフェールの方針変更による革命主義陣営の分裂によるものである。すなわち、ジュイアールによれば改良主義への移行、ヴァンデルヴォルトによっても、「しっかり組織的義務に結び付いた組合と、突撃、攻撃派の、つまり、クーフェの書籍と建築労働者の間のバランスを取る」とされる新しい方針が批判されたのである<sup>86)</sup>。実際、この事件に関して改良主義者は、グリフェールによる、および腰のゼネラル・ストラ

---

する下部の労働者の強い反発を直接のきっかけとしていた。労働者主義の代表的活動家とされる二人が極めて似た事件を引き起こしたことを指摘しておこう。拙著、前掲、参照。

85) 1908年7月30日に、建築労働者とこれを支援するCGT委員会のデモンストレーションに対する弾圧によって4名の死亡者と100名を超える負傷者を出した事件。グリフェール、ブージュエらの逮捕となった。ヴァンデルヴォルトはこれにも1章を当てている。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* VII VILLENEUVE-ST-GEORGES (1907-1908) pp. 143-160.

86) メトロン辞典によると、彼の任期の8年間に、グリフェールは総同盟の指導を、改良主義者の影響力から守るとともに、彼がわめきたてや *braillards* と呼び、火事場で暴力を説教する人々から守ろうとしていた。彼は、彼らの「革命的ロマン主義」、しばしばナイーブな反抗主義はフランス労働運動にとって危険であると感じていた。というのは、それは政府にCGT弾圧の理由を与えるからと。Cf. MAITRON, *op. cit.*

年表Ⅱ プールジュからアミアン

1904年	11月29日	最初のゼネラル・ストライキ委員会開催	
	12月	南部農業労働者ストライキ グリフェール支援	
1905年	1月～8月前半	グリフェール結核悪化による休養	
		フランス社会主義者の統一 フランス社会党結成	
	1月22日	ロシア血の日曜日事件 ロシア革命	
	3月	モロッコ事件	
	10月	パリ労働取引所から CGT 締め出し	
1906年	1月	グリフェール CGT 事務所購入 (会社設立) グリフェール ドイツ・フランスの共同デモンストレーションのためベルリン行き	
	3月	パ・ド・カレ県炭鉱爆発 1,100人の死亡 大ストライキ ノール県への波及	
	4月23日, 28日	クレマンソーによる弾圧	
	4月30日	グリフェール逮捕 (5月6日釈放)	
	5月1日	メーデー 15万人のスト参加者	
	7月	グリフェール 陶工連盟リモージュ大会参加	
	9月	ガラス工連盟大会参加 ジョレス主催の宴会でスピーチ	
	10月	CGT アミアン大会	
	1908年	4月	グリフェール 反エルヴェスト論説
		5月	パリ近郊建築資材労働者のストライキへの警察の介入, 2人の死亡, 10人の負傷
7月29日		ヴィランヌーヴ・サン・ジョルジュデモ, 軍隊との衝突 4人死亡, 100人負傷	
8月2日		グリフェール, プージュ逮捕	
1909年	2月2日	グリフェール CGT 会館購入問題で辞意表明	
	2月24日	次期書記ニエル選出	

イキ方針に対して、否定的であることにとどまっており、攻撃のイニシアチブをとる行動には出ていない。

「グリフェールに対する組織された反対は、1908年のCGTマルセイユ大会に始まる」とされる<sup>87)</sup>が、「獄中にいる人間を攻撃しないという暗黙

の協定に基づいて改良主義者は沈黙した」。12月にグリフェールが釈放されて以降、改良主義者は「プロレタリアの利益ではなく、「商会」事件を議論するためにCGT指導委員会に出席するようになった」。1909年1月19日における、商会事件でグリフェール批判の中心になった会計レヴィの選挙、グリフェール辞任表明後の2月24日の書記選挙でのニエル選出、これらに改良主義者が反グリフェールの立場で関わっていたのは事実であろうが、具体的指摘はなく、クーフェの関与についても言及はない<sup>88)</sup>。アミアン大会においてグリフェールとクーフェは、妥協、協調しており、改良主義者はCGTの方針に影響力を及ぼしていた。グリフェール自身が改良主義に傾斜しつつあったとすれば、クーフェにとって、CGT指導部を掌握するというよりは協調を維持し、それにふさわしい指導者を選出することが課題であったと考えておく。

この間の経過の理解のために、年表Ⅱを掲げる。

### 第3節 1904年7月29日グリフェール・クーフェ論争

1904年7月29日、パリ青年組合主義者は、CGT書記V.グリフェールと書籍労連書記A.クーフェの講演会を組織した。それは、10月のCGTブルジュ大会における改良主義者と革命主義者の対立を事前に示すものであった<sup>89)</sup>。1905年1月1日付『社会運動』誌 *le Mouvement social* に全文が掲

---

87) CGT指導部の逮捕は、一時的に、グリフェールがわめきたてやと呼ぶ、G.エルヴェの『社会戦争』誌によって刺激された極端に革命的でかなり混乱した人々の手に、CGTトップの地位を与えた。J. JUIILLARD, *Les Gauches Françaises. op. cit.* p. 473. マルセイユ大会での反グリフェールの中心は彼らである。

88) B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 172-173.

89) *Les deux méthodes syndicalistes: réformiste et action directe.* 1905. BN. MFICHE 8-R-20039. ヴァンデルヴォルトによると、この講演は、広く宣伝

載され<sup>90)</sup>、さらに、同年6月の書籍労連大会を前に、CGT委員会による攻撃に対する反論のため、書籍労連中央委員会が、若干の前書きを付けて公表した<sup>91)</sup>。グリフェールとクーフェの労働組合に関する考え方の相違、当時の革命的労働組合主義、改良主義の対立、CGTブールジュ大会、アミアン大会の持つ意味を考察するうえで決定的な資料であり、詳細な検討に値する<sup>92)、93)</sup>。

### (1) グリフェール

公表されたグリフェールのスピーチには、次の見出しが付けられている<sup>94)</sup>。Ⅰ 社会問題 Ⅱ 二つの方法 闘争か和解か Ⅲ 労働者階級の自律的組織 Ⅳ 政府組織の危険と不毛 Ⅴ ストライキ Ⅵ 直接行動 Ⅶ 結論

---

され、後に大いに注目された。また、オランダ語、ドイツ語、スペイン語に翻訳された。Cf. B. Vandervort, *op. cit.* p. 88.

90) *Le Mouvement social* はラガルデルによる編集であり、革命主義者の影響下にあった。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 86.

91) この間のCGTによる書籍労連攻撃と、これに対する書籍労連中央委員会の反論の経過が示される。ヴァンデルヴォルトと同じく、本稿ではこの版を利用した。

92) 講演会がもたれた経緯、主催者パリ青年組合主義者については、ヴァンデルヴォルトも言及しておらず、不明である。各々2時間、グリフェール、クーフェの順でなされた。グリフェールはこの講演について何も触れていないが、クーフェは冒頭で、組合主義の理解についての礼儀正しい論争が提案され、受け入れたと言う。対等な形での講演は、クーフェにとって望ましかったと思われる。また、後から講演することを批判に利用している。グリフェールが対等な形式や、順序に同意した理由は推測しがたい。

93) ヴァンデルヴォルトはこの論争の内容を正確に要約している。ただし、この論争が持つ意味を十分に検討しているとは言えない。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 88-91.

94) 講演に際して示されたのか、後の公表の際にあらためて付けられたのかは不明である。クーフェに関しても同様。

I～Ⅳが、革命主義と改良主義の対比、国家介入とそれに対する労働組合の自立性を扱い、Ⅴ～Ⅶが、具体的な闘争方針、ストライキ、直接行動、ゼネラル・ストライキを論じている。大まかに、前者が理論、ないし理念、後者が実践と言える。

ヴァンデルヴォルトによる要約は、簡潔で、基本的な点を外していない。また、革命的労働組合主義の通説的理解とも共通している。すなわち、労働者の苦しみの根源が、パトロンによる労働者支配そのものにある、それは暴力によって強制されている。この関係を廃絶することなしに労働者の解放はありえず、それを目指すのが革命的労働組合主義である。これに対して、改良主義者は、パトロンとの和解を通じて、改良を実現しようとし、さらに、そのために国家機関を利用するが、それは、パトロンの特権を維持し、労働組合運動を国家の後見の下に置くものである。労働者の解放は労働者自身の仕事でしかありえず、外部の社会的力に従属させてはならない。革命的労働組合主義の具体的な戦略は、ゼネラル・ストライキを頂点とする直接行動である<sup>95)</sup>。

さらに、ヴァンデルヴォルトは、全体として、国家の介入に対する批判が大きな比重を占めることを強調しており、これも肯定されるべきである。グリフェールは、とりわけ労働高等審議会を取り上げるⅣのみならず、Ⅱにおいても、労働局報1903年12月号の局長フォンテーヌとクーフェによる解雇慣習認定案を批判して、国家をパトロンの代理物とみなし、ここからの労働組合の独立の必要性を強調する。また、Ⅲにおいても、「国家社会主義を否定する」ラガルデルを引用して、労働組合を権力の後見の下に置く目論見に抗して、労働組合の自立の必要性を強調する。1891年労働高等審議会、労働局設置、それ以降の種々の労働立法、最終的には1906

---

95) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 88-89.

年の労働省設立に至る、労働者、労働組合に対する国家の介入、これに對抗しようとする姿勢が際立っている<sup>96)</sup>。それは、とりもなおさず、このような動きに労働組合運動の側から協力するクーフェ批判でもあった。すなわち、グリフェールは改良主義一般を批判するにとどまらず、当時のフランスにおいて本格的に展開され始めた労働政策、労働組合を通じて労働者を社会に取り込もうとする政策、それに与する改良主義を否定したのである<sup>97)</sup>。

以上、グリフェールの講演に関しては、ヴァンデルヴォルトの要約でほぼ尽きている。ただし、当時の革命主義を理解する手掛かりを提供する徒弟制、熟練工についての重要な言説が見落とされている。まず、徒弟制度にかかわる二つの発言である。「徒弟制度は、いよいよ不必要になっている。労働者の技術的質は、いよいよ二義的になっている。職 (métier) は消滅している」。徒弟制と熟練の解体が強調される。しかし、徒弟制度の義務化について、「我々も、一時的にはその可能性を信じたが、現実の検討はこの手段が世間知らずであることを示した」とすることからは、動揺する心理を見て取ることができる<sup>98)</sup>。ここには、客観的な現状認識だけでなく、徒弟修業、遍歴、高級靴作り工というグリフェール自身の否定がある。一黄色新聞からの次の引用も示唆的である。「この小さな書物は、すべての人々が手の労働に専念すること、繁栄の中で、平和の下で、家

---

96) *Les deux méthodes syndicalistes, op. cit.* pp. 11, 14.

97) したがって、デュレフスの次の指摘には疑問を呈さざるをえない。すなわち、20世紀初めに、共和政国家が社会を見出し、社会問題を解決するために、それに介入し始めていることに、革命的労働組合主義者は気づかなかつたと。Cf. M. DREYFUS, *op. cit.* p. 45. ただし、グリフェールの議論に、国家介入を排した、労働者とパトロン間の直接対決への志向を見ることができ、その意味で、時代錯誤的と言えなくはない。

98) *Les deux méthodes syndicalistes, op. cit.* p. 14-15.

族、地域、祖国、人類のために働く、斧、金槌、鋤、犁の活動に満ちた国を夢見る友人である」<sup>99)</sup>。手の労働者の一見美しいこの理想郷は、熟練工が自らの在り方に囚われる限り生き続け、パトロンとの社会平和を求める改良主義がそこに根差す。グリフェールはこれを断罪するのである。すでに、CGT1900年パリ大会において、職業別組合から産業別組合に転換すべきとの報告の中でグリフェールは熟練の解体に言及しているが、それは客観的な傾向の指摘にとどまっている<sup>100), 101), 102)</sup>。終生靴作りに愛着を抱いたグリフェールが、靴作り工への帰属意識を否定することは、主体的な断絶を意味していた。ここに彼自身と、彼に共鳴した労働組合活動家たちの革命主義の一つの根拠があった<sup>103)</sup>。

99) *Les deux méthodes syndicalistes, op. cit.* p. 11.

100) 喜安朗、前掲書、「革命的サンディカリズムと労働総同盟」参照。Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* p. 17.

101) 19世紀末から繰り返し「徒弟制の危機」が叫ばれ、解体傾向は否めないとしても、理念、現実的機能の両面で徒弟制はなお根強かった。植字工を例とすると、3年間の徒弟修業とそれに続く2年間の少年工雇用の後に、植字工＝熟練工となるのが支配的であった。拙稿、前掲、参照。

102) 職業別労働組合から産業別労働組合への転換は、労働の在り方と労働組合の発展方向に沿ったものである。しかし、職業別組合原理も根強く、この選択も、現実からの飛躍を伴っていた。書籍労連について見ると、パリにおいては、植字工組合を中心に、印刷工組合、鑄造工組合、ステロ版工組合など職業別組合から形成されていた。また、グリフェール自身が職業別組合である靴工組合に属し、上部団体である皮革労連の書記に選ばれており、ここでも事情は似ていたと推測される。建築労働者に関しても、同様の傾向が指摘される。Cf. Yong-Jae LEE, *Syndicalisme de métier et syndicalisme d'industrie. Mutation et identités des ouvrier du bâtiment dans les années 1880-1914.* 1998.

103) 熟練工への帰属意識を主体的に否定することに革命主義の根拠を見るのは、客観的な熟練の解体を革命主義に結び付ける通説と若干ニュアンスを異にするものである。喜安朗、前掲書、上村祥二、前掲論文、参照。Cf. M. DREYFUS, *op. cit.*

(2) クーフェ

クーフェの講演にも、Ⅰ 労働者の状態についての一般的評価 Ⅱ 組合組織、職業あるいは産業連盟、労働取引所 Ⅲ 結論 の見出しが付けられ、さらに、Ⅱには、一般的活動、労働協約、労働組織、組合員の職業紹介、精神的金銭的支援、ストライキ、徒弟制度、職業的一般的連帯、組合員の尊厳と独立、社会立法の適用、活動の方針 の小見出しが付けられている。ヴァンデルヴォルトの要約は、アナキストによる CGT 支配、暴力批判、日常闘争での行動が改良主義と似通っていることなど、簡にして要を得てはいる<sup>104)</sup>が、改良主義の通説的理解に従っており、クーフェの講演が持つ意味をつかみ切れているとは言えない。

ⅠとⅢに関しては、革命主義と改良主義の対立点が述べられることを指摘するにとどめ、本論Ⅱについて検討しよう<sup>105)</sup>。Ⅱは、クーフェ自身によって、組合の実際の役割、活動の方法に分けられている。前半では、主催者がパリ青年組合であることから、若い組合員に対する教育目的を考慮したのか、上記小見出しに沿って、組合活動の実際が紹介される<sup>106)</sup>。公表されたものを読む場合にも、やや詳細すぎるかに感じられる話が、聴衆にとって分かり易かったかについては疑問である。ただし、書籍労連書記を含む、25年にわたる組合活動に基づくクーフェの揺るぎない自信が、一種の説得力を生んでいる。いくつかの特徴的な言説を指摘しておこう。まず、

104) Cf. B. VANDERVORT, *op. cit.* pp. 90-91.

105) Ⅲには、「組合員の知的、道徳的練磨を追求することを重視する」点で、ペルチエと見解を同じくする、との注目すべき発言が見られる。Cf. *Les deux méthodes syndicalistes*, *op. cit.* p. 35. ゼネラル・ストライキの提唱者とされるペルチエと改良主義の代表クーフェの関係の検討は、我々に残された課題の一つである。

106) 後にあらためて公表されることから見て、クーフェが講演の主な対象を、書籍労連加盟の組合員としていたとも考えられる。

ストライキに関して、「革命的、あるいは直接行動の支持者の主張に反して、ストライキにあたって、そのメンバーに金銭的救済を確保することは組合、連盟の任務である」とする。また、「それは、いつも言われるように、相互救済ではなく、組合員自身を団結させる絆を強め、組織を堅固にし、闘争の際にメンバーの忠誠心を確かにするためである」<sup>107)</sup>と。グリフェールが金銭的準備よりも「闘争心」を重視することを批判し、両者の結び付きを強調する。さらに、書籍労連規約を紹介しながら、ストライキの具体的な条件を示す。ここにも長年にわたってストライキを指導してきたとの自負と、ストライキを煽るだけのグリフェール批判を見て取ることができる。

次に、徒弟制と、国家介入についての言説に注目しよう。興味深いことに、クーフェは、「徒弟の数の制限は、職業的、集团的エゴイズムの結果であることから」、徒弟制度を否定するグリフェールが原理に基づいている可能性を認める。しかし、多くの職業において、徒弟がひどい搾取を受け、しかも、徒弟期間終了後に雇用されず、不幸に陥るので、数の制限が必要であるとする。国家介入に関する次の言説も指摘に値する。「私は、プロレタリアが公的権力の介入に、全面的に期待することの危険性、そうすることによるイニシアチブと社会闘争への効果的介入を麻痺させる危険性を指摘してきた」と。しかし、状況によっては、「法律の介入が本当の改善をもたらすことが可能である」とし、女性と児童の保護に関する1841年法、1874年法、また、労働者手帳廃止法、労働審判所法、作業場衛生法などをあげる<sup>108)</sup>。どちらの場合も、グリフェールの主張を認めるようなポーズを取りながら、最終的には批判するとも言える。しかし、クーフェが国家介入に関しては強い拒否の姿勢を貫いており、また、職業的利害を重

107) Cf. *Les deux méthodes syndicalistes*, *op. cit.* pp. 25-26.

108) *Les deux méthodes syndicalistes*, *op. cit.* pp. 27-29.

視しながらも、そこに閉じこもるのではなく全労働者的立場からの運動を重視してきたことも事実である<sup>109)</sup>。全体として、原理を尊重したうえで現実的判断を下すという、老練な組合活動家の姿を見ることができる。

「活動の方法」と題するⅡの後半は、クーフェ自身によって、「大きな興奮と、労働者世界で極めて感情的な批判を引き起こす」とされ、彼の講演のもっとも重要な部分である。クーフェによるグリフェール批判は、革命主義、暴力等への一般的なものを除くと次の点に尽きる。すなわち、革命主義者も現実的行動では彼らが改良主義者と呼ぶものと変わらないことである。まず、グリフェールがストライキに関して、イギリス、ドイツと比較して遜色のない成果を上げているとすることに対して、次のように言う。グリフェールは、ストライキを、勝利、和解、敗北に分類したうえで、和解も成功、労働者の利益の改善とみなしている<sup>110)</sup>が、そうすると、「パトロンに対する不屈の闘争という彼の体系を完全に破壊」することになり、「フランスの革命主義者たちが、通俗的な植字工、単純な改良主義者と同じように行動してきたし、していることに気づいていない」<sup>111)</sup>と。就職斡旋事務所廃止運動の際に、「下院のロビーに、大臣控室に、恥ずか

109) 国家介入に対する強い拒否は、クーフェがその代表でもあったプロレタリア・ポジティヴィストの基本方針に沿っていた。また、書籍労連内で、女性労働者の排除を主張するユニオニストに対して、働かざるをえない事情を考慮すべきとし、アルマヌとともに、全産業的問題として捉え、解決法を探るべきとした。拙著、前掲、参照。

110) グリフェールは、労働局資料から、フランスでは、イギリス、ドイツに比べて、金銭的準備が弱いにもかかわらず、より以上の成果を上げていることを引き出し、その原因を「闘争精神」によるものとする。また、改良主義がこの闘争精神を弱めるとの批判につなげる。*Les deux méthodes syndicalistes*, *op. cit.* pp. 15-17.

111) *Les deux méthodes syndicalistes*, *op. cit.* pp. 30-32. クーフェは、いわば後攻めの利を生かして、グリフェールを批判している。このストライキ統計についての議論では、グリフェールは一本取られている。

しくも、議員や公的権力の介入を求める直接行動の司教たちが見られた」と痛烈に皮肉る<sup>112)</sup>。

以下の発言からは、クーフェの意図が批判にとどまらないとも読み取れる。「グリフェール同志自身が、直接行動は暴力を意味しないと宣言しなかったか。そうすると、私が普及させ、擁護するやり方との間にどのような違いがあるのか」<sup>113)</sup>。「この行動（直接行動）のやり方を宣言しながら、彼らは実際には、改良主義の組合主義者と正確に同じやり方で行動しているのである。すなわち、彼らはパトロンと議論し、譲歩を受け入れ、さらに、我々以上ではないとしても、政治家、官僚の介入に訴えるのである」<sup>114)</sup>と。クーフェの批判は、革命主義者の暴力は拒絶しながらも、直接行動主義と改良主義の違いを相対化する。我々は、クーフェが、J. アルマースを指導者とする、書籍労連内の革命派と抗争しながらも妥協、協調するのを見た。CGTにおける革命主義、グリフェールとの闘争にあたって、この経験が踏まえられていたと考えるべきである。グリフェールの講演が一本調子の改良主義批判であり、二者択一を迫るのに対し、クーフェは革命主義を批判しながらも、両者の併存、妥協の可能性を探っているところがあり、これが、彼の議論の核心であった。

ヴァンデルヴォルトは、本論争が改良主義と革命主義の違いを明らかに

112) 「それは改良主義者のやり方の効果のために、素晴らしい議論である。したがって、書籍労連、同じ戦術に従う諸組合に向けられた批判は価値がない」と、たたみかける。*Les deux méthodes syndicalistes, op. cit. p. 32.*

113) 「アナーキストの自由裁量によって、幾人かがすすめる純粋に革命的、暴力的活動に関しては、私は、それを拒否する側である」との発言には、暴力をアナーキストに結び付け、グリフェールと切り離す意図があったともとれる。*Les deux méthodes syndicalistes, op. cit. p. 34.*

114) *Les deux méthodes syndicalistes, op. cit. p. 34.* クーフェの講演からは、一方では、愚直、真面目一本やりの活動家の姿とともに、他方では、老獪な組合政治家とも言うべき一面が浮かび上がる。

し、CGT プールジュ大会での対立を手際よく事前に示すものとした。確かに、この時期、両者の対立がもっとも激化していた。プールジュ大会では、改良主義者の比例投票制動議が否決され、ゼネラル・ストライキと言うべき1906年メーデー方針が採択された。しかし、書籍労連が9時間労働日要求を含む独自の方針に従うことは黙認された。CGT 委員会が個別産業連盟に介入できない原則から当然のこととはいえ、それは、両者の対立の程度を示すものでもある。事の経緯は不明としても、プールジュ大会を前にグリフェールとクーフェが並んだ講演がもたれたことは、これと照応するものと言える。さらに、大会後に、どちらの側からもあらためてこの講演が公表されたことも示唆的である。ヴァンデルヴォルトは、アミアン大会を前にグリフェールが社会党内の改良主義の一代表であるジョレスとの提携を模索していることを指摘した。アミアン大会では革命主義と改良主義、グリフェールとクーフェが妥協する。本講演におけるクーフェによる暗黙の協調提案を、グリフェールが受け止めたと考えることは許されるであろう。

## おわりに

A. クーフェの全体像構成にとって、残された課題はなお多い。労働組合運動に限定しても、少し遡って、ゼネラル・ストライキの提唱者とされるF. ベルチエ、さきに進んで、グリフェールを引き継ぎ、ながくCGTを指導したL. ジュオーとのかわりの検討は不可欠である。さらに、当初からの構想に含んでいた、労働高等審議会におけるクーフェの役割の解明は、本稿における考察によって、より強く促されることになった。